

在外研究員研究報告書

2018年11月11日 受付

所 属	文化情報学部		氏 名	沈 力	
職 名	教授				
研究課題名	Function Categories in Chinese and Japanese from a typological perspective				
研究期間	2017年04月9日 ~ 2018年03月31日				
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先		
	2017年4月9日-9月30日	Parise France	Institut National des Langues et Civilisations Orientales, France		
	2017年10月1日-11月30日	台北, 台湾	中央研究院歷史語言研究所		
	2017年11月30日-2018年1月31日	北京, 中国	北京大学中文系		
	2018年2月1日-3月31日	北京, 中国	中国社会科学院語言研究所		
研究費	万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日	
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日	
	『中原官話拡張の時空分析— 同音線の形成機制』	北京大学出版社		2019年10月31日(予定)	
	演 題	講 演 学 会 名		講演年月日	
1. 結果表達的策略与類型 (Strategies and Typology of Causal expressions)	台湾国立清華大学言語学人文社会学 院「語言学大師講座シリーズ」招待講 演。		2017年10月27日		
2. 挖掘新事实, 發現新規則—從 漢日持續体標記的描述所看 到的	2017当代言語学前沿—新描写主義論 壇(Frontiers in Contemporary Linguistics Towards New Descriptivism-)招待講演。		2017年12月02日		
3. 在漢語中附加成分能充当主 語嗎?(Can adjunct be the subject in Chinese?)	中国社会科学院語言研究所招待講演。		2018年01月04日		

2017年度在外研究期間における成果報告

1. はじめに

在外研究研究成果報告者は、ここ20年、言語生態における自律性・伝播性・変異性・混合性を研究してきた。とくに理論言語学の方法を用いて、自然言語の内在的自律性を探求・発見し、地理情報科学(Geographic Information Science)の研究成果を利用して、言語の時空間的変化に関する研究領域を開拓している。2017年04月-2018年03月の在外研究期間において、これらの研究課題を中心に、段階的な進展が得られ、それらの研究成果を、国際的に著名な研究機関および大学で講演するという形で公開したことを報告する。

2. 結果構文における新展開

理論言語学における大問題の1つとして、ことばはいかにわれわれの世界を捉えているのかという課題が挙げられている。言語学者はことばの意味論の研究を通して、人類が万物の存在・運動を“因果関係”としてとらえていることを解明している。その“因果関係”は英語では結果構文(Resultative Construction)として現れ、「主要述語-結果述語」という構造を持っているのが特徴である。一方、影山1996、鷺尾1997の研究によれば、日本語にも、英語と同様な「結果述語-主要述語」構造を持っている結果構文があるが、ただ、「主要述語」に結果成分が含まれなければならないという点が英語と異なると主張されている。報告者は、この一年間、クルーシャルな根拠を見つけ、日本語の結果構文は英語と異なり、中国語と同様に[結果副詞-結果述語]の構造を持つことを発見した。すなわち自然言語の“因果関係”は構文として現れる場合、2つの構造があることを判明した。一つは[一般述語-結果述語]、もう一つは[結果副詞-結果述語]ということである。

この研究成果は、2017年10月27日、台湾国立清華大学言語学人文社会学院「語言学大師講座シリーズ」として当該学院A202会議室で講演し、「結果表達の策略与類型(Strategies and Typology of Causal expressions)」という題で公表されている。

3. 「主語」と「主題」について

“語彙生成意味論”は、事件タイプと事件構造が如何に統語構造を決めるのかという問題を解くのに重要な方法論を提供してくれる。Dowty 1979, Jackendoff 1990, Levin and Rappaport Hovav 1995, Pustejovsky 1995等によれば、動作動詞が句構造におけるふるまいはその動詞の語彙概念構造によって決まると主張している。

(1) 動作性動詞の項の実現課程

語彙概念構造：[(x) ACT ON (y)]

↓
 項構造 : (x (y))
 ↓
 句構造 : [NP (= x) [V NP (= y)]]

cf. Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (Baker 1988)

この計算システムによれば、附加成分(adjunct), たとえば場所格, 具格などは動詞の語彙概念構造に登録されず, 当然動作動詞文の主語となることができない。ところが, 報告者は, 中国語の附加成分が主語の振る舞いをするように見える現象を見つけた。

(2) 这个 房间 画 画儿, 那个 房间 吃 饭。

This-CL room drew paint that-CL room eat food

‘この部屋は絵を描く(ところで), その部屋はご飯を食べる(ところだ)。’

ここで, 附加成分となる「この部屋」は動詞の左側に生起しているのだから, 主語のように見える。しかし, 報告者は, 日本語の「輪転機は/*が新聞を刷る」からヒントを得て, 実は中国語の「この部屋」は主語ではなく, 主題であることを提案した。中国語の動作動詞には2つの機能がある。一つは, stage-level の叙述機能であり, もう一つは individual-level の叙述機能を持っている。前者は[主語-述語]構造を持ち, 後者は[主題-述語]構造を持つ。この2つの機能は非対称的であり, 前者は動作動詞の基本機能, 後者は動作動詞の派生機能であると観察している。

この研究成果は, 2018年01月04日, 中国社会科学院言語研究所大会議室で公開講演を行い, 「在漢語中附加成分能充当主語嗎?(Can adjunct be the subject in Chinese?)」という題で公表されている。

4. C型対応関係回避原則の発見

“形式記憶”と“意味記憶”のどちらが人間にとって負担になるかという質問は理論言語学の領域においてもっとも基本的な問題である。周知のとおり, “形式記憶”のほうが負担になるということである。言語記号は形式と概念の結合体であるので, われわれは“形式”がどれくらい避けられるかを基準に, 形式(F)と意味(M)の対応関係を観察すると, 形態素レベルにおいて3つの可能な対応関係にまとめられる。

(3) a. A型 (F↔M) : FはMが成立するための必要十分条件である。

b. B型 (F←M) : Fは任意のMが成立するための必要条件である。

c. C型 (F→M) : 任意のFはMが成立するための十分条件である。

A型対応関係は“負荷均等”タイプ。この種の対応関係は, “意味単位”が増えれば, それに対応する形式を増やす仕組みである。B型対応関係は“負荷減輕”タイプ。この種の対応関係は, “意味単位”が増えても, それに対応する形式を増やさない仕組みである。C型対応関係は“負荷超過”タイプ。この種の対応関係は, 一つの“意味単位”が増えれば, 2つ以上の形式を増やす仕組みである。

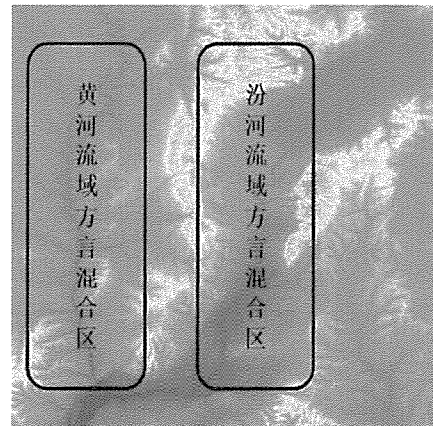
本研究は、中国の山西方言と日本の岡山方言の対照研究を通して、次のような規則を発見している。異なる言語機能を持つ2つの形式(x and y)が、歴史的変化によって共通の機能を持つようになった場合、その中の1つ(x or y)は、生存の競合過程において消失するか新機能が生じるかの、新機能の対立という均衡状態に到達するという傾向が見られることを観察した。この傾向は(3c)の“C型対応関係”の回避原則として名付けた。

この研究成果は、2017年12月02日に、中国社会科学院・曲阜師範大学主催の「2017当代言語学前沿—新描写主義論壇(Frontiers in Contemporary Linguistics Towards New Descriptivism—)」という国際学会で招待講演を受け、「挖掘新事实，發現新規則—從漢日持續體標記的描述所看到的—」という題で公表されている。

5. GISによる言語伝播に関する研究領域の開拓

歴史比較言語学の立場は、歴史的資料に基づいて、①同じ系統に属する諸言語を比較して、かつて存在したそれらの言語の源であるところの祖語を再建し、②それぞれの言語が祖語の段階からどのようなプロセスを経て成立したのかを解明することを目的とする。方言の場合も同様である。歴史的資料に基づいて、諸方言を比較して、共同体の祖語を再建するということである。しかし、歴史的資料が不足している場合、共時的データすなわち方言データに基づいて、祖語を再建するということも考えられる。この方法の前提として、言語変化は常に時間的変化と空間的変化が伴われるからである。

本研究の目的は、黄河流域・汾河流域における晋方言地区（北部）—中原官話地区（南部）間に見られる言語変化の段階性から、両地域間の言語伝播の実態を解明することである。そのために、本研究では、黄河流域の晋方言地区・官話方言地区の間に位置する汾河流域・黄河流域方言混合地帯において、①音韻的特徴の地理分布を村単位で調査・記述し、②GIS(Geographical Information System)を用いて、当該地域の地形情報と、調査地点の位置情報・言語情報を結合し、③比較言語学と地理情報科学の手法を結びつけて言語伝播順序推定のための定量化モデルを提案するということである。これは5年前に進められた研究プロジェクトであり、在外研究期間中に一定の成果が得られた。たとえば、晋語における入声弱化現象は、中原官話の脱入声化によって引き受けられた現象である。本研究では、入声弱化の度合いは、晋語に繋がるルートである靈石高地：霍州南部→霍州北部→西側にある汾西南部→汾西北部→靈石全部というルートで弱目が目立ってくることを発見した。さらに、上記のルートは、人間の交流度(人口密度×徒歩コスト)の順序と一致していることをGISによる計算から得ている。



この研究成果は、2017年05月12日、フランス国立東洋言語文化学院に招かれ、講演

を行い、“A Gradual Path to the Loss of Entering Tone: Case Studies of Jin Dialects in the Lingshi Highlands Shanxi”という題で公表している。また、同じ題目で中国社会科学院語言研究所でも招待講演で公表した。

6. GISに基づく方言伝播の計算（公開講座）

在外研究の一年間、上記の研究成果の発表のほかに、長年 GIS に基づく方言伝播の研究成果の普及教育を行ってきた。2017年12月、北京大学の「中国言語学センター」に招かれ、若手教員・大学院生に6回「方言学シリーズ講座」を行った。講座題目「言語生態と地理情報システム」である。このシリーズ講座では、筆者の従来の学際的研究の成果を紹介し、地理情報科学におけるGISの技術指導を行っていた。受講者が、このような理論と実験を結び付ける教育を受けて、言語学の研究に対して学際的な視野を持つようになることが期待できる。具体的内容は次の通りである。

2017年12月08日—22日に「如何追尋声調演變軌跡（如何に声調變化の軌跡を追うのか）？」という題で、3回講義を行った。

主讲人：沈力 同志社大学教授

12月連続講座：「如何追尋声調演變軌跡？」

場所：人文学苑6号楼B124

12月08日（周五）10:00-12:00：「用GIS的方法解讀声調混合的方言」

12月15日（周五）10:00-12:00：「用GIS的方法追尋入声消失的軌跡」

12月22日（周五）10:00-12:00：「用GIS的方法追尋声調分化条件的傳播」

もともと北京大学の滞在期間は2017年12月1日～2018年1月31日であったが、講義は好評を受けたため、先方の要請で、2018年03月02日—16日にさらに、「如何運用地理信息系統（如何にして地理情報システムを活用するのか）？」という題で、3回実験型講義を追加した。内容は下記の通りである。

主讲人：沈力 同志社大学教授

3月連続講座：「如何追尋声調演變軌跡？」

場所：人文学苑6号楼B124

3月02日（周五）：如何用GIS来解析地理信息

3月09日（周五）：如何用GIS来掌握語言分布

3月16日（周五）：如何用GIS来计算移動成本

7. まとめ

研究と教育は同志社大学にとって車の両輪でどちらも欠かせない存在である。在外研究は、まさに長年教育を携わってきた報告者にとって、きわめて重要な充電の時期である。報告者は、フランス・台北・北京を回ってきて感じたのは、一流大学にいる教員は、教育重視型と研究重視型に分かれ、教育重視型は教授法開発や多く授業数担当になり、研究重視型は

研究成果を上げ、若手研究者育成担当になる。両タイプの教員は各自に固有のエネルギーと知恵を捧げているということである。このシステムのメリットは、他大学と競争するのにより豊かな研究時間が保証され、大学の学術水準が維持されうると思われる。それに比べて、同志社大学は、教育と研究はどの教員にとって課せられる任務であるため、教育にしても研究にしても中途半端な時間しか確保できないというシステムになっている。そのために、今回の在外研究は極めて貴重なチャンスであり、報告者は、できるかぎり一流大学・一流研究機関で講演し、言語学分野で幅広く交流をやってきたつもりである。

在外研究の波及効果が2018年度にも及んでいる。①影山太郎特任教授と連携して「同志社大学言語生態科学研究センター」を設立し、さらに、②「<語>の本質に関する総合的研究—孤立型・膠着型・複統合型言語の語形成と句形成—」という科研Bを申請し、③2019年03月02日に「語言生態科学国際研究会—黄河流域的方言伝播— (International Symposium on Ecological Linguistics: Dialects propagation in Yellow River Basin)」という国際フォーラムを同志社大学寒梅館で開催する予定である。最後に、④いままでの研究をまとめて、『中原官話拡張的時空分析—同言線的形成機制』（北京大学出版社）を出版する予定である。2017年度の「充電」の効果は、今後さらに表れるだろうと期待できる。

